

大学生活では様々な人々・価値観との出会いがあります。新しい出会いそのものはもちろん、その出会いをどのように受け入れ、自分の糧にするのかが大学生活の醍醐味だと私は思います。

私が進路を意識したのは高校生頃でした。当時、自分にとって身近な社会に関する事柄を幅広く学びたいと考えていた私にとって横浜国立大学はまさにぴったりの大学でした。横浜国立大学のいい所は一つのテーマについて多角的に考える環境が与えられている所です。進学したのは経済学部国際経済学科でしたが、学部や学科に捉われず色々な授業を受講することが出来ました。そのため、一見異なる種類の授業であっても受講するにつれて「この授業ではこの問題を労働者の目線から考えているんだな。一方この授業は企業の目線で考えているんだな。」といったように目線を変えれば見えるものが違うということに気づかされました。在学中、数多くの面白い授業を受けましたが中でも印象的だった授業の一つは「社会福祉政策論」です。社会福祉政策論では「待機児童問題」や「ジェンダー論から見る新しい家族の在り方」など社会制度の変化や価値観の変化によって浮き彫りになった社会問題に対する解決策を模索するという経験をしました。経済学の中でも最も身近な問題について考えることが出来るこの学問に興味を持ち、大学3年生から始まるゼミナールでも同学問を専攻しました。ゼミナールではグループを作り、各テーマに沿って研究を行います。論文研究はもちろん、実際の関係者にインタビューをしたり、企業を訪問したりといったフィールドワークも実施しました。机上の学習だけでなく現場の声を活かして研究に反映させることが出来たのも貴重な経験だったと感じています。現場の声を聞くということでは1年間の海外留学も貴重な経験の一つです。私は日本で起きている社会問題が海外ではどのように考えられているのか学ぶため大学の交換留学制度を利用して1年間ドイツの提携大学で学ぶ機会を頂きました。海外大学での勉強はもちろん現地の人達の声を聞くことは自分の持つ目線の数を増やすことにも大いに繋がりました。

私は現在会計システム会社で営業として働いています。営業の仕事はお客様の表面的・潜在的なニーズを汲み取り最適なシステムを提案することです。大学で得た多様な価値観を知り、それを受け入れるということは仕事する上でも大切なスキルの一つです。

現在、学校・社会あらゆる場面において技術の進歩や価値観の変化から男女の境が少しずつ無くなってきましたが、それは社会が画一的な考え方で機能しなくなってきたことの証でもあると私は考えます。そんな社会に生きる皆さんが大学生活を通じて得たいものは何でしょうか？私の話が少しでも参考になれば幸いです。

2012年度卒業生 片岡めぐみ